

故郷第二場面 読んだ読んだ

三年四組

氏名

この時突然、わたしの脳裏に不思議な画面が繰り広げられた。紺碧こんぺきの空に金色こんじきの丸い月がかかっている。その下は海辺の砂地で、見渡す限り緑の西瓜すいかが植わっている。そのあと、彼は父親にことづけて、貝殻を一包みと、美しい鳥の羽を何本か届けてくれた。わたしも一、二度何か贈り物をしたが、それきり顔を合わす機会はなかった。

主人公は、三十年も前のルントウとの思い出を鮮明に覚えていた。二人は、半日もせずに仲良くなるほど、気が合い、お互いに普段経験のない話をしあって、別れが辛かった。しかし、環境が違うため、一度か二度の贈り物の後は、それつきり会っていない。

くん

主人公は、正月にルントウが来るのが待ち遠しかった。三十年前から仲良く、思い出も鮮明に残っていた。主人公はルントウに憧れをもっている、ルントウは神秘の宝庫で、知らないことを教えてくれた。ずっと一緒にいたいと思っても、正月は過ぎる。その後は、一、二度の贈り物はしたが、顔を合わせることはなかった。

くん

主人公は、ルントウに会いたかった気持ちや半日で仲良くなったこと、ルントウの心の中は神秘の宝庫だったこと、ルントウとの別れが悲しかったことなど、三十年前のことを鮮明に覚えていたり、「父も生きていた」と思っていることから、昔の方が楽しかった、昔に戻りたいと、現実に逃げ腰になっている。

さん

主人公は突然、三十年近い昔のルントウの様子を思い出し、それと同時にルントウの象徴でもあるような紺碧の空、金色の丸い月をも思い出していた。あのころは、ルントウに会えることに嬉しさを感じていた。ルントウは、主人公にとつてかけがえのない人でもあった。しかし、とうとう別れが訪れ、離ればなれになった二人。この後も一、二度贈り物をした。けれどそれきりで、顔を合わすことはなく、二人の気持ちは離ればなれになったのであった。

さん



主人公は突然、父の生きていた、三十年前のことを鮮明に思い出した。ちょうどその年は大祭の当番に当たっており、ルントウが来るので主人公はとても楽しみにしていた。ルントウとはすぐに仲良しになり、ルントウに城外のことを聞き、雇い主と雇い人の関係ではなく友達となっていた。しかし、ルントウはとうとう連れていかれ、一、二度の贈り物をするだけで、やっぱり所詮雇い主と雇い人であり、それきり顔を合わさず、あつさりとしていた。

さん

主人公は城内で優雅な生活を送っているが、それが主人公にとつて狭く息苦しいものだということが、「高い塀に囲まれた中庭から四角の空を眺めている」という皮肉交じりの一文から分かる。その生活は、主人公の友人も同様のため、広い世界を生きているルントウのいろいろな話が、主人公にとつて鮮明で、そんなルントウがいつしかかけがえのない存在へと変わっていった。別れの際の涙は、そのためなのだろう。

くん